

ひょうご 水百景

No.1-2 大谿川（豊岡市城崎町）

～悪臭漂う川を再生させた二層河川～



写真-1 城崎ロープウェイ「大師山上駅」展望台から城崎温泉街を撮影（平成27年4月撮影）

■ 昭和40年代頃から悪臭漂う川に！

写真-1は、城崎ロープウェイの大師山上駅近く展望台から城崎温泉街を撮影したもので、その向うを流れるのが一級河川・円山川です。温泉街を流れる大谿川（おたにがわ）が円山川に合流する地点は、河口から約3kmでいわゆる感潮区間になっています。そのため、大谿川が本川の背水の影響を受けて河川水が滞留することがありました。

昭和30年代までの大谿川は水もきれいで、ホタルやエビ、ウナギ、カジカなどがいたそうですが、昭和40年代になると温泉排水や家庭排水の流入が増大し、それが滞留することで特に夏期は悪臭が漂う川になっていました。

兵庫県土木部河川課創設50周年を記念してまとめられた『兵庫の河川事業50年のあゆみ』で、歴代の河川課長が対談されていますが、そのなかで昭和44（1969）年3月から昭和49（1974）年4月まで河川課長をされた故・三露嘉郎さん（筆者の元上司）が大谿川について以下のような話をされています。

夏に城崎に泊まりましたら、町の中を流れている大谿川が夕方から朝まで、臭くて臭くてしょうがない。びっくりしまして、いろいろお聞きしますと、まだ下水道ができていないので、温泉水を全部大谿川へ流しているというようなことでありました。そこで、町当局、あるいは町議会にも話に行き、町で公共下水道をみるという前提であれば何とかしようという話になりまして、当時としてはあれが初めてであったと思いますが、いわゆる2階建てのような河川改修をしました。



写真-2 城崎温泉街を流れる大谿川（令和2年7月）

■ 悪臭漂う大谿川を 2 層構造にして再生、水質向上に呼応してホタルが飛び交うまでになる

ということで、県は、将来城崎町（現・豊岡市）が公共下水道を整備するという前提に立って、流下能力の向上と環境対策を目的とした河川浄化事業を導入することとします。

具体には、河床下に約 1.8m×1.8m のボックスカルバート（暗渠）を設置し、温泉街からの排水をここに流入させ、雨水と排水を分離することによって河川の水質を改善するとともに、洪水時には上流部で導水樋門（写真-3：月見橋直上流にある）を開けて洪水の一部をボックスカルバートに流入させ、流下能力の向上を図るものです。

昭和 44（1969）年度に河川浄化事業（2 層構造の河川整備）に着手し、昭和 58（1983）年度に完了しました。

なお、長年の懸案だった城崎温泉街の污水处理施設「城崎浄化センター」については、城崎町桃島（現・豊岡市）に兵庫県代行により建設が進められ、平成 15（2003）年 12 月 1 日に供用開始されています。下水道が整備されたことによって大谿川の水質は格段に向上し、今では木屋町通あたりで数百匹のホタルが飛び交うようになりました。

これに呼応して、地元では「城崎温泉大谿川ホタル再生の会」を平成 20（2008）年に立ち上げて、ホタルが生息できる環境をつくるべく活動を始めました。ホタルは土の中でサナギになり羽化しますが、大谿川の川底はコンクリート張りのためホタルの生息には本来適していません。そこで、川にある小石を両岸に集めるなど工夫を重ねた結果、砂がたまって草が生え、ホタルが棲める環境になったそうです。



写真-3 導水樋門

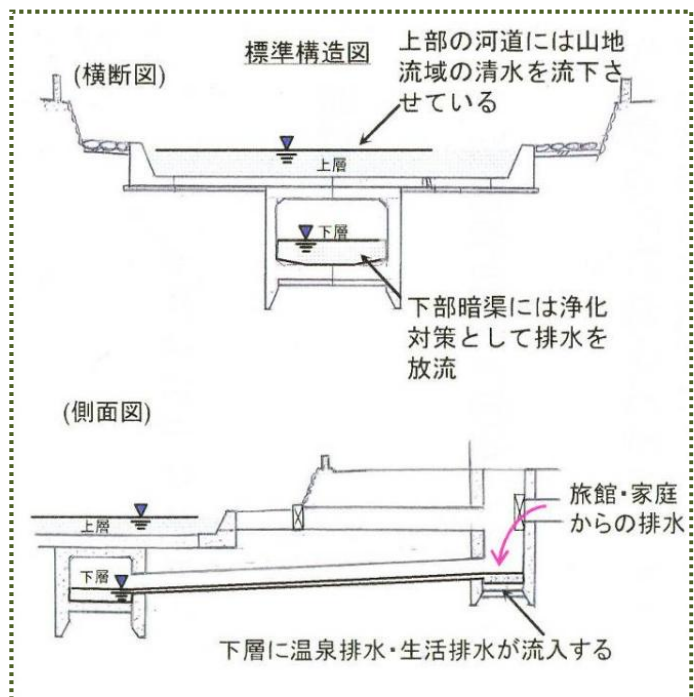


図-1 大谿川断面図（豊岡土木事務所提供）

■ 城崎温泉の景観保全に向けて

大震災から復興した城崎温泉の景観は、昭和 30 年代に始まる高度経済成長期において、観光需要の増大に対応すべく旅館経営の近代化・合理化による増改築が進み、城崎独特の温泉情緒が失われつつありました。

そこで町は、昭和 42（1967）年策定の「城崎温泉総合都市基本計画」に修景保存地区を定め、昭和 49（1974）年には伝統・美観・情緒の保全を目的に「城崎町環境保全基本条例」を制定しました。

一方、昭和 57（1982）年には住民団体「城崎温泉の町並みを守る会（平成 2 年に「城崎温泉町並みの会」に改称）」が組織され、景観の保全がまちづくりの共通認識となってきました。加えて、山陰海岸国立公園の特別地域であった城崎温泉街が、平成 2（1990）年 4 月普通地域に変更されたことで建築物に対する指導・助言体制が弱化したため、町は平成 4（1992）年 8 月 11 日兵庫県の景観条例に基づく歴史的景観形成地区の指定を受け、大谿川周辺に建ち並ぶ木造旅館群、柳並木など和風を基調とした景観を守り育てていくこととしました。

このような流れの中、町は「歴史と文学といで湯の街」をキャッチフレーズに温泉情緒を維持増進させるため、住民の協力を得ながら、文学碑の建立や和風街路灯の設置、街角案内標識の設置などを進めています。そういえば、街中を歩いていて多くの文学碑が目につきました。

まんだら湯前の吉井勇の歌碑、大師山上駅近くの展望台横の吉田兼好の歌碑のほか、富田碎花の歌碑、向井去来の句碑などがあり、きのさき温泉観光協会公式サイトによると、ほかにも島崎藤村や志賀直哉、松尾芭蕉など全部で23箇所の文学碑があるそうで1時間～2時間でまわることができるのか。「七湯めぐり」もいいけれど、「文学碑めぐり」にもチャレンジしてはいかがでしょうか。



図-2 城崎温泉の地図

■ 大谿川の内水対策

震災復興における大谿川の治水対策は昭和初期に一応の完了をみましたが、それ以降も城崎温泉街は、昭和34(1959)年9月の伊勢湾台風や、昭和40(1965)年9月の台風23号などによりしばしば浸水被害を受けていました。

そこで国は、円山川本川の堤防を築造するとともに、大谿川の内水排除を目的として、昭和44(1969)年に城崎水門を、昭和49(1974)年に城崎排水機場(ポンプの排水能力=15m³/秒)を設置しました。

しかし、平成16(2004)年10月の台風23号の影響で大谿川が増水し浸水被害が発生したことから、国土交通省豊岡河川国道事務所では、再度災害防止のため城崎排水機場の排水能力を23m³/秒に増強する改修工事を平成22(2010)年度末に完成させています。



写真-4 大谿川河口の城崎水門



写真-5 右の建物が城崎排水機場

■ モノローグ

大正 14 (1925) 年の北但大震災から復興した大谿川沿いの美しい景観や温泉街の情緒などが評価され、「城崎温泉の街並み」が「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法（通称：古都保存法）」の施行 40 周年となる平成 19 (2007) 年 1 月、財団法人古都保存財団の「美しい日本の歴史的風土 100 選」に選ばれています。

「歴史的意義」、「(自然環境との) 一体性」、「(歴史的・文化的資産の) 集積・広がり」、「(地元住民等による) 保全活動」、「(法令・条例等に基づく) 永続性」に基づいて選ばれたものです。

城崎温泉街の美しい歴史的風土を守り育てていこうと日々努力されている人々にも改めて拍手！



写真-6 鴻の湯



写真-7 まんだら湯



写真-8 御所湯



写真-9 一の湯



写真-10 柳湯



写真-11 地蔵湯

写真-10 は柳湯に掲げられた案内板で、柳湯の由来が以下のように記されています。

中国の名勝西湖から移植した柳の木の下から湧き出たというのでこの名がある。以前はこの浦側にあり、外傷やはれものに薬効があったといわれる。

ヒメヒオウギズイセン

アヤメ科ヒオウギズイセン属(クロコスミア属)の雑種で、ヒオウギズイセン とヒメトウショウブとの交配種である。両親は南アフリカ産であるが、耐寒性に優れ、また繁殖力も旺盛、日当たりの良い荒地から林床のような日陰、乾燥地帯から湿地にも耐え、全世界で野生化している。「金魚草」と呼ばれることもあるが、キンギョソウとは異なる。花茎から穂状花序を分枝し、各々にオレンジ色の花を付ける。花期は 7～8 月。佐賀県では移入規制種の指定を受けており、栽培が条例で禁止されている。



写真-12 鴻の湯近くの大谿川沿いに咲いていたヒメヒオウギズイセン

【参考資料】

- 1 豊岡市 HP <https://www.city.toyooka.lg.jp/>
- 2 『兵庫の河川事業 50 年のあゆみ』 兵庫県土木部河川課 平成 3 年 3 月
- 3 『災害からの教訓～伊勢湾台風 50 周年～』 豊岡工事事務所 安田勝美
4. 『美しい日本の歴史的風土 100 選』 日本百選 都道府県別データベース <https://j100s.com/rekishitekihudo.html>
- 5 『文学のまち～城崎温泉を愛した文豪・歌人たち』 きのさき温泉観光協会 <https://kinosaki-spa.gr.jp/about/writer/>
- 6 『城崎温泉、景観形成地区(兵庫県指定)、ヒメヒオウギズイセン』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※ 発行：平成 23 (2011) 年 6 月 『ひょうご水百景』 No.1

改訂：令和 8 (2026) 年 4 月 『ひょうご水百景』 No.1-2